

# 万葉の川心

元横浜市立子安小学校 教諭

澤井園子

明日香皇女の城上の殯宮の時に、

柿本朝臣人麻呂の作れる歌一首併せて短歌

(巻第二 一九七番歌)

明日香川 しがらみ渡し 塞かませば

流るる水も のどにかあらまし

夏を前にして、髪をばつさり切る。二〇年近く通う馴染みの美容室は、多くを語らずとも分かってくれる。髪のかせも仕事上結ぶことも、伸びた後の楽な手入れまで考慮してハサミを滑らせていく。職人でありアーティストであり、時に旧友との再会のような時間になる。こうした場所があることを幸せに思う。「娘が独り暮らしを始めたんです。巣立ちました」とつぶやいた。「涙は見せずに見送られたのですか」と聞かれた。その通りだった。いつものように笑顔で送り出した。娘の人生は娘のもの、いつかは離れると生まれた直後から自分に言い聞かせていた。「私だったら引き止めますよ」と言われて、そういう姿を見せるのも素直でいいと思つた。寂しいに決まっている。あの日の強がりや母からの餞だったのかもしれない。

「明日香川に堰を渡してとめたら、流れ去る水も皇女の遠ざかることも、ゆるやかに異なるに違いないのに(あるいは云わく、水も淀んでいるに違いない)」。一九六番歌と続くこの歌は、天智天皇の皇女である、明日香皇女が亡くなった殯の時に、柿本人麻呂が夫婦の仲のよさを歌い、捧げた挽歌である。皇女は長く病にあつた。その平癒を願って異例の沙門(僧)一〇四人を出家させたという。また、殯とは日本の古代に行われていた葬送儀礼で、死者を埋葬するまでの長い期間、遺体を納棺して仮安置し、別れを惜しみ、死者の靈魂

を慰めた。復活を願いつつ、同時に死を受け止め確認する期間でもあつた。お名前にかかわる「明日香川」、そこに堰を渡すことは難しい。それでも、この流れをとめていたなら、あなたが遠ざかることをゆるやかにできたならと深い哀しみを詠んでいる。

奈良の山々は、古代から圧倒的な存在感でこの地を守っている。山そのものが神として祀られている神社もある。そこに川は流れる。山からの気を運ぶように、恵みを分けるように、心の淀みを消し去るかのよう、止まることなく清らかに流れている。歌碑を探しながら、川に沿って歩いた。その表情は豊かで、川音は澄み、万葉の人々もこの川を見ていたかと思うと不思議な思いがこみ上げた。もう一度、自分に帰っていい。子育てを終えた今、自分の夢を見て、自分のための何かを始めてみてもいいのではないか。しがらみはいろいろあるけれど、山に川に力をもらったような気がした。明日香川(飛鳥川)は、奈良県明日香地方を流れる川で、奈良県高市郡の高取山を源として大和川に入る。写真の歌碑は、奈良県高市郡明日香村豊浦の甘樫丘の脇を流れる飛鳥川の飛鳥橋たもとの公園内にある。

「何とか一人でやってみる」と言つて、娘は新しい一步を踏み出した。夢に向かつて進むあなたを、ふるさとに流れる川のように見守り続けたい。



奈良県高市郡明日香村豊浦の飛鳥橋たもとして